

(株)PQC研究所 加藤 宏光

「すかいらく」という名のファミリーレストランをご存知の方も多いと思う。著者が養鶏生産に関わる臨床獣医師として開業したのは、三三歳の終盤であったから一九七六年、随分昔のことになる(今年で九四八年)。

開業した年から数年相模原で生産される採卵養鶏場の方々と付き合い頂いた(注1)。

その折に、国道沿いにあったファミリーレストランが(すかいらく)であった。当時はまだファミリーレストランはそれほどポピュラーではなかったで、「小綺麗なレストランだなー」と思っ、食事をした。それから何年かして、筆者の拠点である福島県郡山市にもこの店は筆者の店内を含めたママ友たちの交流の場で、いつも

何組かのママ友グループが集っていたものであった。今にして思えばその昔の井戸端会議が形を変えてそこにあったのである。この「すかいらく」を立ち上げたのが横川寛(よこかわきわむ)氏である。

インターネットを渡り歩いていて「伝説の経営者」もう一度原点に「外食産業を牽引した八四歳の覚悟」という記事に行きあった(二〇二二年十月一日・毎日新聞、有料記事)。

氏は一九七〇年、東京・府中に兄弟四人で一軒のレストランを始めた。府中市の市鳥が雲雀、そこで店の名前を雲雀の英語「スカイラーク(後にすかいらく)」とした。これこそ、日本のファミリーレストランの第一号であった、という。著者が相模原で行きあった「すかいらく」は一九七六年、一号

店から六年で相模原にもできていたことになる。最盛期に七三〇店舗にもなった「すかいらく」は一九八二年に東証一部に上場した。八四年には東証一部に上場した。業界最大手である。グループトップになったのは二〇〇六年、そして二〇〇八年、七〇歳の時に経営悪化の責任を問われて「すかいらくグループ」の社長を解任された。

氏は「バブル経済が崩壊して、最大手のすかいらくが低価格路線を打ち出したことで業界全体が追随を余儀なくされた。外食産業をデフレに追い込んだ責任は間違いなく、すかいらくにある。止められなかった僕も同罪だ」と語る。

しかし、横川氏は本物の味を追って高倉町珈琲という名のカフェチェーンで復活している。ウリは「店で手作りするリユッタ

チーズをたっぷり使った「リユッタパンケーキ」である。氏の挑戦は「今の、安さと時間をつぶす場所というファミリーレストランや喫茶店と正対の店をつくること」。いま、氏が追いかけているのは「お客さんのおいしい」であり「質の悪い食材を安く提供しても意味がない」である。

思えばバブル崩壊の頃、世の中すべてが落ち込んだ雰囲気にも包まれ、価格も抑えられて「低価格」が良いことだという世情になっていた。「すかいらく」が名を「ガスト」と変えて、セルフサービススタイルになり、飲み放題があったかも客サイドへ進化したように見せかけながら、実は人件費の削減のための変貌であることは見取れた。メニューも安いモノばかりが並べられ、高価な料理はなくなってい

た。セントラルキッチンで準備された品物がチェーン店へデリバリーされるシステムで伸びてきた「すかいらくグループ」であったが、何となく安物に姿を変えたレストランへ来る客層は随分変化したように感じたものである。それでも二〇〇八年に横川氏が社長を解任されたのは、バブル崩壊に対応する低価格路線が的を射たものでなかったのか? 当時はダイエー創始者の中内功氏が声高に掲唱した「価格破壊」が時代を風靡し、とにかく安く、をモットーに流通が変貌しているさなかなのである。

著者はこうした流れにいかんかならない違和感を持っていった。大規模を否定するわけではないが、非効率の故に弱者を淘汰するのが正義とは断じきれなかったのである。

「すかいらく」と似た匂いのするトクバタ劇に「大家家具騒動」がある。大家家具は、高級路線と会員制を基礎とした創始者・大塚勝久氏と、安価な家具量販店との対決を危惧した勝久氏の長女・大塚久美子氏のお家騒動で、安価で大量販売路線を主張する久美子氏によって

父・勝久氏が解任された経過がそれである。勝久氏は高級路線を維持するために「匠大塚」を立ち上げた(現在は長男・勝之氏が社長で勝久氏は会長)。

父・勝久氏が解任された経過がそれである。勝久氏は高級路線を維持するために「匠大塚」を立ち上げた(現在は長男・勝之氏が社長で勝久氏は会長)。

経済には、四つの波があると言われていて、最も長いのが約五〇年周期の今「コンドラチエフの波」、次いで二〇〜三〇年周期の「クズネツツの波」、さらに短い周期のモノとして二〇年周期の「ジュグラの波」、そして三〜四年周期の「キチンの波」である。時の変遷は時が過ぎて振り返ると実感できる。バブル最盛期には新宿区の書店で、多くの大学生らしい若者が株式投資の手引書を立ち読みしていた。バブルが崩壊すると、高利潤産業が直ちに投げ売りされた。しかし、食品等の製造業には大きな影響はなかった。ICチップでさえ世界の七〇%を日本製が占めていたが、過剰生産と外圧で見る影もない(現在台湾メーカーの熊本工場稼

働で再起の芽が出ているが…)。世界的な流通システムを改造しているコンビニ業界でも乱立から淘汰の方向をとりつつあり、産業の盛衰を実感する。著者の四八年を振り返っても、バブル期には「価格をいとわない、特別なモノ」が求められ、バブルが崩壊して「安く、安く、安く」に追われ、そしていま新たな形で「再び本物」を求める流れが湧き上がっているように思われる。

注1:公務員上がりの若い時代、わけもわからない若造に優しくお付き合い頂いた生産者の方々、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

注2:景気の四つの波
キチンの波(キチンサイクル)。企業の在庫の変動が要因であるとされる。たとえばスーパーやデパート等の小売店では好況期には大量に商品を仕入れ品切れを起こさないように在庫に商品を保管する。しかし、景気が後退の局面に入ると、仕入れを減し在庫の商品を減らす。小売店の仕入れ減はメーカーの売り上げの減少に繋がる。メーカーの売り上げ減少は労働者の賃金低下を招く

し、経済の勢いは衰える。このように、在庫の変動が景気循環を形成するというのがキチンの波。
ジュグラの波(ジュグラサイクル)は設備投資を原因とする景気循環のこと。およそ一〇年を一つの周期とする。企業の機械等の設備は平均約一〇年程度で償却されるから、周期がこれに従うとされる。企業がこの設備投資の循環と重なるので設備循環とも呼ばれる。

クズネツツの波(クズネツツサイクル)は建設投資を原因とする景気循環のこと。およそ二〇年を一つの周期とする。建設物の需要が約二〇年で一周することをクズネツツが発見したことからこのように定義された。また、二〇年というのは生まれたての子どもが親になる年月でもあり、人口の変動も原因であるといわれる。

コンドラチエフの波(コンドラチエフサイクル)は技術革新を原因とする景気循環のこと。およそ五〇年程度を一つの周期とする。コンドラチエフの波は、景気循環の波の中で、最長の周期。技術革新に該当するのは、自動車・航空機・医療機器の発明やコンピュータ技術(今後のAI技術を含む)等。